

恋愛イニシアティブ

目次

恋愛イニシアティブ

5

新婚の主導権

271

恋愛イニシアティブ

プロローグ

帰りたいな。

最近、ふとした瞬間にそう思うことが増えた。

山代梓はキーボード上で軽やかに躍らせていた指を止め、視線を窓の外に広がる蒼穹へ移した。澄んだ空の青は郷里の名古屋と変わらない色合いで、彼女の瞳を染めている。

八月の下旬に、名古屋にある本社から大分県に転勤して約一ヶ月。名東ホームコーポレーション大分支社の営業企画部で働く梓は、仕事中にときどきこのように空を見上げる。それは、胸の裡に湧き上がるやりきれなさや寂しさを誤魔化すためだ。

梓は大きく息を吐き、視線をパソコンの画面へ戻す。再び指を動かして作成中の企画書へ意識を集中させた。

この会社は、能力次第でどこまでも上に行ける実力主義だ。そして、上に行く者は必ず名古屋本社に勤務することになっている。

だから、大分支社にいても結果さえ出せば本社に戻る可能性は十分にあるはずだ。逆に言えば、結果が出なければいつまでもこの地に居続けなければならない。

この一ヶ月、己の心の重石がとれたことはなかった。

いつまでここにいればいいのか。それともずっとここにいるのだろうか。

仕事をこなしながらも、不安が頭から離れない。そんな毎日の繰り返しだった。

あの日、彼と出会うまでは。

梓の色彩を全て塗り替え、運命までも変えた男に囚われるまでは――

1

九月下旬のまだ残暑が厳しい時分、唐突にソレはやって来た。廊下から、どよめきが聞こえてくる。

「え？ いったいなに？」

黄色い悲鳴まじりの声など、転勤してから初めて聞いた。梓が思わずそう疑問を零すと、隣の席に座る事務員の水野が答えてくれた。

「あ、山代主任は初めてですね。うちの会社の税理士さんがいらつしゃったんですよ」

「税理士さん？ なんてこんなに騒がしいの？」

本社では、梓が所属していた営業企画部と経理課のフロアが違っていたので、税理士に会う機会は全くなかった。税理士という職業は、会社を騒々しくさせる存在なのだろうか。

すると水野がクスクス笑いながら教えてくれた。

「見れば分かりますよ。……ホラ」

カチャリ。扉が開く音と共に背の高い影が入室してくる。

その瞬間、フロア内の空気が動いた。若い女性からパートのおばちゃんまで、「女」の性を持つ者達が一斉に熱を孕んだように見える。

梓は、その存在を目にして瞳をまん丸に見開いた。

す、すごいイケメン！ これはカッコいい！

百八十センチ以上は確実にある長身に、見事に整った容貌。鼻筋はすつと通っており、ゆるく弧を描いた唇は色つぼい。やや切れ長の、深い色合いの瞳を見つめていると、こちらの魂が吸い取られそうなほど、水際立つた男前だ。

「……ものすごくいい男ね。あの人が税理士？」

水野に問い掛けると、彼女はうつとりとした表情で彼を見つめたまま頷く。

「はい。去年からうちの税理士さんになった方なんです。林和久さんとおっしゃって、三十四歳の独身なんですよ」

「ふーん、詳しいわね」

人間離れた美貌にドキドキしつつも、少しだけ既視感を抱いて梓は首をひねった。

うーん、どこかで見たことがある顔だわ。梓は記憶を探りながら、応接ブースへ向かう男の姿を目で追う。

すると、男がブースに入る直前、一瞬だけ視線をこちらに向けた。梓の眼差しと交わった刹那、美しい顔に笑みが浮かぶ。だが、それは「ニヤリ」という表現が相応しい禍々しいもの。彼女の背筋に悪寒が走った。

なによ、今の。梓が絶句しつつチラリと隣の人物を見ると、水野は未だに酔いしれた顔で税理士が消えた辺りを見つめている。どうやら彼の黒い笑みを好意的に捉えているようだ。

つてことは私だけ？ 誰もあの表情を不吉に思わないの？

梓は目を瞬かせて、水野と同じように彼がいた辺りを見やる。しかし当然ながらその答えは出ない。だが、梓の胸中にはなぜか嫌な予感がどんどん蓄積されていく。

ふと思い付いて、梓はパソコンへ向き直り、取引先一覧を引つ張り出した。この会社はマンションから工場まで幅広く物件を扱うリース建築を手掛けているので、人の出入りが多い。梓本人は税理士と面識はないが、営業フロアを通ったときに彼とすれ違っていたのかもしれない。

そう思っ取取引先一覧を見ていると、その中に、『林税理士事務所』の名前を見つけた。梓はピンときた。

この名前……ってもしかして。

彼女が脳のデータバンクから情報を引き出そうとしていると、「山代さん、ちょっと」と呼ばれた。顔を上げると、そこには税理士と応接ブースにいるはずの経理課長が立っている。

「悪いけどお茶を出してくれる？」

「は？」

言われた内容に、梓は目を見開いてしまった。お茶くみはパートのおばちゃん達の仕事だ。正社員であり主任の立場にある梓がやることではない。

「あの、なぜ私が？」

立ち上がりながら聞き返すと、課長は申し訳なきような顔をして、視線を一瞬だけ応接ブースへ投げた。そして背が低い梓に合わせるようにやや腰を^{かが}屈め、小さな声で話す。

「税理士の林先生がね、君にお茶を出して欲しいって言っているんだよ。その、ほんの少しだけでも話したいって」

「……」

それってつまり。

隣に座る水野が息を呑む気配を、梓ははっきりと感じた。初めて会った美貌の男性が梓にアプローチをしている——つまりそういうことなのだろう。

「いや、でも、仕事中ですし……」

助けを求めて直属の上司である営業課長へ目を向けるが、彼は梓と視線が合うなり親指を立てて満面の笑みを浮かべた。

グッドラック、じゃないって！

「あの、お断りしてもいいでしょうか」

「駄目」

はつきりきっぱりと断られ、梓の表情が引きつる。そんな彼女を^{あわ}憐れみの眼差しで見やった経理

課長は、

「あとで理由を教えてあげるから、今は頼まれてくれ。私が資料を取りに行っている間に出して置いて欲しい」

と言いつ残して去って行った。

しばらく呆然と立ち尽くしていた梓だったが、四方八方から好奇の視線にさらされるのが辛くなり、ふらふらと給湯室へ向かった。

でもちよつと待つてよ。話すって仕事中になにを話すのよ。税理士先生と会ったのは初めてだし、というか目が合ったのも一瞬だし。なにをどうしたらこの展開になるのよ？

梓は現在、営業企画部——売上を分析して営業戦略をたてたり、営業部員をサポートしたりする部署——に所属しているが、もともとは営業部員として多くの人と接してきた。難しい顧客との交渉にも慣れている。だがこのような事例にはお目にかかったことなどないため、パニックに^{おち}陥っていた。

それでも混乱する思考をなんとか落ち着かせて緑茶を淹^いれ、恐る恐る応接ブースへ近付く。そこはフロアの一角を背の低いパーティションで区切っただけのスペースだ。支社長の好みで選んだ、座り心地の良いソファに例の人物がいた。

長い指で書類をめくる姿に、彼女の視線は自然と吸い寄せられる。身長だけでなく、手や足など彼は体のパーツが大きい。座高も高く、すっきりと背筋が伸びて姿勢がよかった。

ふいに彼が顔を上げて梓を見た。

男の色香をたつぷりと乗せた微笑みが彼女へ向けられる。バッチリと目が合った梓は己の顔面が熱を持つのを感じ、慌てて客人の前に湯呑みを置いた。次いで経理課長が座る席にも置く。そのまま顔を伏せて下がるうと思ったが、突き刺さるような眼差しに負けてほんの少し目を上げた。

「お疲れ様です。仕事の手を止めさせてしまい申し訳ありません」

声だけで背筋が震えたのは初めてだと梓は思う。脳髄を揺らす低くて蠱惑的なセクシーボイス。

梓は返事もできずに固まってしまった。

今、私は自分でも分かるほど顔が赤くなっている……

たかが声でここまで反応するな、と己を叱咤するものの自分の意思ではどうにもできない。林税理士はその反応に気を良くしたのか、美貌の笑みをますます深くして名刺を差し出した。反射的に受け取ってしまい、しまった、と臍を噛むけれども遅い。

「仕事抜きで会えませんか？ 連絡を待っています」

彼は輝かんばかりの笑顔を振りまいて上機嫌だ。梓は本気で意味が分からなくて呆気にとられた。

「で、でも、あの——」

「ああ、山代さんありがとうございます」

梓の声を遮るかのように、重そうな資料の束を抱えた経理課長が入ってくる。梓はお盆と名刺を持って応接ブースをそそくさと退出した。

給湯室を片付けて自席に戻ると、待ちかねた様子の水野が話し掛けてきた。

「山代主任、林先生になにを言われたんですかつ？ まさか付き合ってくださいとかじゃないです

よね」

険のある顔つきでまぐし立てた水野は、梓が手にしている名刺に素早く目を向け、眉間に皺を寄せる。

「……そこに書いてある番号って、プライベート用の番号じゃないんですか？」

言われて気が付いた。名刺には手書きで携帯電話番号が記されていたのだ。

そういえば連絡をくれて言っていたわね。

ようやく冷静になってきた梓は、大きく息を吐いてからその名刺をびりつと破った。

「あっ！」

水野が漏らした声は思いのほか大きく、周囲の視線を集めてしまう。彼女は亀のように首を竦め、その状態のまま梓に話し掛けた。

「なんで破っちゃうんですか、もったいない」

その顔には、「捨てるぐらいなら私にちょうだい」とはつきり書かれている。だが梓は曖昧に答え、更に細かくちぎってごみ箱へ捨てた。

梓は彼へ連絡をするつもりなど更々なかったし、かといって受け取った名刺を無断で他人へ渡すつもりもない。そのまま捨てて、仮に名刺を拾った誰かが彼へ電話を掛ければ、梓が名刺を捨てたことがばれてしまうだろう。だから、念入りに紙吹雪状態にしてごみ箱に捨てたのだ。

梓は仕事を再開したが、脳の片隅で先ほどの男を思い出していた。

びっくりするほど綺麗な顔立ちだった。しかも背が高くバランスの良い体躯。彼がやって来た時

に女性社員が騒いだのも頷ける。税理士ではなくモデルか俳優でもやればいいのに、とお節介なことを考えてしまうほどイケメン。

梓だつて人並みの美意識を持つものだから、あれほど魅力的な男性に秋波を送られれば胸がときめいてしまう。だが心の奥底で警鐘が鳴り響くのだ。なにかおかしい、と。

初めて会った——というか目が合っただけの——美形に惚れられるほど、自分は絶世の美女ではない。己の外見を客観的に表現するならば、メイクで作られたそこその容姿、といった感じだ。身長が百四十八センチしかないのもあって、二十九歳になった今も可愛いと言われることがある。しかし、あんな美男子に釣り合うほどではない。この状況には裏があると思って当然だろう。

更に言うなら、あのときの彼の表情。初めて目が合ったとき、一瞬だけ見せた不敵な笑み。腹黒さを如実に表したあの微笑を思い出すたびに、梓は背筋が小さく震えてしまう。

君子危うきに近寄らず、よ。それに私はしばらくの間、恋なんてしたくない……

梓は胸の奥でくすぶる小さな痛みに気付かないふりをすることにした。

だから彼が仕事を終えて応接ブースから出てきても、熱い視線を向けられても、梓はパソコンから目を離さなかった。

午後八時を過ぎた頃。梓のデスクに経理課長が近付いてきた。

「お疲れ様、山代さん」

いつもなら遠くから声を掛けるだけなのに珍しい。そこで梓は彼が昼間に言った、『あとで理由

を教えてあげるから』という言葉を出す。きつと理由を話しにきてくれたのだろう。

「お疲れ様です。……会議室へ行かれますか？」

まだ社員がちらほらと残っている。言いにくい話ならば場所を移した方がいいだろうと氣を利かせて言う、と、経理課長は静かに頷いて先に会議室に向かった。梓はパソコンをロックしてからその後が続く。

二人は蒸し暑い空氣が籠もる会議室の窓を開け、シンプルな会議用デスクを挟んで向かい合う。

そこで梓は経理課長から意外すぎる林税理士との繋がりを知り、啞然とした。

林税理士事務所は、本社社長に紹介されたのだという。

昔から業務をお願いしていた税理士が高齢で引退することになっていたため、一年ほど前から新たな税理士を探していた。すでに何人か候補がいたのだが、ある日突然、遠く離れた本社の鶴の一声で林税理士事務所と契約することになった。どういう関係なのかまでは知らないが、本社社長と繋がりがある以上、林税理士の機嫌を損ねない方がいいと経理課長は思っているのだという。

そこまで聞いた梓は、経理課長の前で失礼だと思いつつも、大きな溜め息をついてしまった。なぜ急にそんな小さな税理士事務所がうちと契約できたのか、分かってしまったのだ。

「……ありがとうございます、課長。なぜお茶くみを断れなかったか、よーっと分かりました」「すまんね山代さん。そういうわけだから来月も頼むよ」

経理課長は申し訳なさそうに告げて帰っていった。

そういえば、うちの税務監査は毎月あるんだったわ。

梓は席へ戻りながら、深い溜め息をついた。

2

秋も深まる十月上旬の三連休。

最終日となる今日、梓は大分県宇佐市に住む親友の希和子^{きわこ}の家へ遊びに来ていた。彼女は、以前名古屋本社の同じ部署で働いていた後輩だ。

数年前に大分県人と結婚した彼女は、名古屋から離れて、夫の家族と同居している。同居とはいつでも夫の実家は資産家で広大な敷地を持っているため、離れて夫と子供と共に住んでいるのだ。おかげで梓も遊びに行きやすい。

大分県で唯一^{ゆい}の友人なので、梓は希和子と会うのをいつも楽しみにしていた。しかし……

「梓せんばーい、なにキョロキョロしてるの？」

「い、いやあ、別に」

今日ばかりは早く帰らなかった。というかここへは来たくなかった。梓がもとも会いたくない人物が、この敷地内に住んでいるからだ。だが親友から、

『最近全然会えなくて寂しいですー！ もう一ヶ月はご無沙汰ですよ。三連休って一日も空いてないんですか？ あーいーたーいー！』

という可愛らしいメールを受け取ってしまったのは、無下にできない。それに会いたいののは梓と同じ。結局、遠い宇佐市まで電車に乗って——梓は大分市在住なので、同じ大分県内であっても距離はかなり離れている——遊びに行くことを決めた。ただ希和子はもうすぐ臨月に入る妊婦なので、あまり長居はしないつもりだ。

離れにいますので夫側の親族には会わないはずなのだが、やはり落ち着かない。母屋^{おもや}からなるべく見えないようなルートを選びながら離れの玄関まで歩いてきたが、向こうは自分がここにいることに気付いているかもしれない。

もし気が付いていたら。

それを考えるとお尻がむずむずしてくる。

そんな梓の様子を見て、希和子が訝^{いぶか}しげな顔で聞いてきた。

「先輩、本当に今日はどうしたんですか？ もしかしてアノ日？」

「違うわよ。……その、今日って母屋にご家族はいらっしゃる？」

「へ？ そりゃいますよ。旦那さまはこっちの離れにいるけど」

「それはいいんだけど。……ねえ希和子。うちの会社が林税理士事務所と契約したのって、あんたの紹介？」

「あ、驚きました？ 実はお兄さんに頼んでおいたんです。嫁ぎ先の仕事が増えたらいいかなーっと思って」

ふふふ、と嬉しそうに笑う表情は愛らしいが、今回ばかりは「なに余計なことをしてくれるの

よ」と言つてやりたい気分だった。

なぜなら、梓に声を掛けた林税理士は希和子の夫の兄なのだ。

林税理士事務所は、この敷地内にある希和子の夫の実家。ちなみに希和子自身は名東ホームコーポレーション代表取締役社長の妹であり、会長の娘でもある。本社社長にとって林税理士は、義弟の親族となるのだ。

めっちゃコネ契約じゃん。そりやお茶くみも断れないわよ。

しかし悲しいかな、会社勤めの身である以上、こういつたしがらみは避けられない。

それでも思わず溜め息が零れてしまう。

「……なんで希和子の旦那がうちに来ないかなあ」

「別に旦那さまが行つてもよかつたんですけど、大分支社へはお義兄さんが行きたいって言つたらいいですよ」

やつぱりな。あれほどのイケメンがごく普通の女に、数秒目が合つただけであからさまなモーションを掛けるなど信じられない。あれは間違いなく梓のことを知つた上での行動だ。

梓は八月下旬に大分支社へ転勤してきたとき、一度だけ希和子の家へ遊びに来ている。おそらくそのときに自分を見たのだろう。何を気に入つたのかは知らないが、全く嬉しくない。あの無駄にキラキラと輝く美貌の男が梓に声を掛けたせいで、若手の女性社員から恨みがましい目つきで睨まれ、パートのおばちゃんからは興味津々の目で見られるのだから。

営業企画部がある三階のフロアに、二十代の女性社員は梓と水野しかないのです、まだいい。し

かし、一階にある店舗で一般向けの賃貸物件の対応をする部署には女性スタッフが多い。すれ違つたに睨まれるなんてたまつたものではない。眼差しが痛いなんて初めての経験だ。

「あの、梓先輩、会社でなんかありました？ 旦那さまの方がいいとか言うなんて……もしかしてお義兄さんが仕事で何か失敗でもしたんじゃない？」

眉間に皺寄せた梓を見て、希和子が不安そうに尋ねてきた。

「ううん、そうじゃなくつてさ。ただなんとなくだけど、お義兄さん、私のことを知ってるみたいな感じだったから」

「そりや私の結婚式で会つたことがあるからじゃないですか？」

「……」

そういえばそうだった。三年前、梓は新婦友人として、林税理士は新郎の兄として出席しているはずだ。どうりで見たことがある顔だと思つた。すっかり忘れていたけれど。

すると希和子がなにかを思い出したのか、「あつ」と小さな声を出した。

「この間、梓先輩がうちへ来たとき、お義兄さんに先輩のことを訊かれました」

「ふ、ふーん。どんな風に？」

「えっと、『今日来てた子つて友だちか』って訊かれたから、今月から大分支社に転動してきた、会社の先輩だつて答えただけです」

ということとは、一ヶ月ほど前に何か気に入られるようなことがあつたということか。いつ見られたのかサッパリ分からないけど。

「希和子、お義兄さんって他にはなにか言っていなかった？」

「いえ、それ以外はなにも。……あの、本当はなにかあったんじゃない？……？」

「あー、すごいイケメンが来たって会社中の女の子達が騒いでたから、印象に残ってる」

「ああ！ お義兄さんって旦那さま以上のイケメンでしょ。びっくりしませんでしたか？」

「そうね、『色々』な意味で驚いたわ」

色々、の部分強調してみたけれど、もちろん希和子には通じない。

「でしよー！ ちょっとおかしいところがあるけど、まあ悪い人じゃありません」

身内にもそう言われるなんて、やっぱりおかしいのか、あの人。

梓が思うに、彼はおそらく自分の行動が相手を追いつめることを理解している。あれほどのイケメンなら、己の容姿が周囲にどのような作用をもたらすかなんて、よく知っているはずだ。なのに、あんなに堂々と梓へ粉をかけて無駄な諍いを引き起こそうとする理由とは。

——クレームでも何でもいいから、私から彼に連絡するように仕向けているとは思えない。

梓はそつと額を手で押さえ、溜め息をつく。なにか理由があつてそうしているのだろうが、もう少しやり方を考えて欲しかった。いや、それ以前にできればそつとしておいて欲しかった。自分は恋愛をする気はさらさらないのだから。

梓はしばらく希和子と雑談した後、日が沈みはじめたので帰ることにした。

「じゃあ、そろそろ帰るね」

「では送っていきまーす」

もうちょっとお喋りしたかったが、林税理士と遭遇したくない。駅まで送っていくと申し出てくれた希和子に甘え、玄関を出て車庫へ向かう。

すると二人の気配を察したのか、敷地内で放し飼いになっている十二頭もの犬達が吠えながら近寄ってきた。

林家は近所から犬屋敷や犬御殿などと呼ばれているらしい。希和子の義両親が無類の犬好きで、捨て犬の里親を探すというボランティア活動をしているのだ。ただ引き取り先の見つからなかった犬達はこの家で飼うことにしているため、こうして大所帯になってしまったそうだが。

梓も犬好きなので、喜んで犬に近付いた。犬達の中でも一番好きな柴犬へ顔を近付ける。すると口の周りをペロペロと舐められた。無邪気な犬の行動に癒される。

いい気分ですら車庫へ向かったものの、どうやらそこは梓の鬼門だったらしい。車の整備をしていたのだろう、見覚えのある顔があつた。

「ああ、もう帰るの？」

「げっ！ 林税理士!? なんでここにいるのよ！」

まるで梓が帰るのを待っていたかのように佇む男を見て、梓の足が一步、二歩と後退する。

「お義兄さん、友達を駅まで送ってくるねー」

「なんだ、それなら俺が送っていくぞ。妊婦は大人しくしていろよ、危ない」

それは嫌だ！ 旦那はどうした！ と梓は心の中で喚いた。

梓がここへ来るときは駅まで希和子の夫が迎えに来てくれたので、帰りも送ってもらいたい。

だが、かろうじて仕事で培った笑みを貼り付けた。

「いえ、お気持ちはありがたいんですが、まだ希和子と話したいこともあるので――」

「赤ん坊が泣いているぞ」

彼が指差した離れから、確かに赤ちゃんの泣き声が聞こえてくる。

「あつ、やだ寝てたと思ったのに！　じゃあお義兄さん、すみませんお願いします」

「ああ、任せてくれ」

「ちよ、希和子！」

「梓先輩、ごきげんよう」と足早に立ち去る友人の声が、風と共に吹き抜ける。友人へ伸ばしていた梓の手は、虚しく空を掴んだ。

「では行きましょうか」

義妹との会話と比べてやけに丁寧になった口調が、心持ち弾んでいるように聞こえるのは気のせいだろうか。梓はごくりと口内に溜まった唾液を呑み込んでから口を開く。

「あ、あの」

「はい？」

「お気持ちは大変嬉しいのですが、歩いて帰りま――」

「ここから最寄り駅まで十五キロ以上ありますよ」

「まずい。梓は背筋を冷や汗が伝うのを感じた。

「ええっと、来るときは弟さんに乗せてもらったので――」

「あいつ、今、出掛けているんです」

「使えないな、旦那！

全く罪のない友人の夫を心の中で非難した梓は、それでも諦めずに最後の抵抗を試みる。

「確かこの辺りってバスが走っていたと思うんです。それを使えば――」

「駅まで何回か乗り換えの必要がある上、休日だと一日一往復って路線もありますよ」

ああ、八方塞がり。このままここで意地を張っていても帰れないので、梓は仕方なく彼が開けたドアから助手席に乗り込んだ。

車が走り出してすぐ、彼の方から話し掛けてきた。

「日が落ちると結構寒いですね。寒気などありませんか？」

「いえ、大丈夫です」

「それは良かった」

なにやら笑いを含んだ声が憎らしい。梓は緊張で声が固くなっているというのに、相手は余裕な態度だ。しかも車内は密室なので相手の声がよく響く。車庫で話をしていたときよりも低くてやや洪い声が梓の脳髓を揺らす。

そういうばこの男は無駄に声が良かった。ウグツと腰にくる衝撃を、慌てて背筋を伸ばすことで誤魔化した。

もうこうなったらここで決着をつけてやる。梓はこれは仕事の延長なのだと無理矢理考えることにして、彼に目を向けた。

「あの、先日会社で名刺をいただきましたが、あれはどういった意味でしょう」
「どう、とは？」

疑問の体裁をとっているが、梓の言いたいことなど分かっているのだろう。面白そうに微笑む表情は、彼女の予想を肯定するものだ。梓は苛立ちを抑えて話を続ける。

「正直なところ困惑しております。話したこともない方から、いきなりあのような行動をされたので」

「貴女の連絡先を知りたくて、ついあのような方法をとってしまいました。気に障ったのなら謝ります。申し訳ない」

ちつとも申し訳なく思っていない口調で返されると、さすがに腹が立つ。

「何か用事があるのですしたら、希和子——義妹さんに訊けばいいのでは？」

「訊いてもよかったですか？ 貴女としては」

「……」

なんかヤダ。とつさに浮かんだのは否定の気持ちだった。「友人を介して男性と知り合う」のなramだしも、「友人を介して、友人の家族である男性と知り合う」というのには微妙な遠慮がつきまとう。付き合ったとしても別れたりなんかしたら大変な気がする。

「でもやっぱりあんな派手なやり方は止めて欲しかったです」

「では仕切り直して。俺と付き合いませんか？」

直球が飛んできた。デッドボールを受けたかのように、梓の頭部が左右に揺れる。

「……あのですね、私と付き合ってもつまらないと思いますよ」

「おや、なぜ？」

小さく笑う声が車内に響く。彼がこの会話を楽しんでいるのは明らかだ。

「今まで仕事一辺倒でしたので、気が利いた会話もできませんし」

「構いませんよ。そういったことは、こちらが心配するものでしょう」

「そうかもしれません。それに休みが不規則になる可能性が高いのです」

会社は基本土日祝祭日は休みだが、営業部員に合わせて休日出勤になることがあるのだ。

しかし彼は梓の抵抗をあつさりといなす。

「それなら大丈夫です。俺は自営業だから休日は調整が利くので」

ちつ、と梓はうまくいかない流れに胸中で舌打ちをする。

「とりあえずメシを食いにいきませんか。確かこちらに来てまだ一ヶ月ほどですよ。地元には結構旨いものがあるんですよ」

「……ありがとうございます。でも、私より他の方と食事に行かれた方が楽しいと思いま——」

「それは俺が決めることだ」
梓の言葉を遮るように放たれた言葉は、さっきまでの丁寧な口調ではなかった。義妹である希和子と話していたときの口調に近い。

「俺は君のことが気になるけど、まだ詳しいことはなにも知らない。君も俺のことを知らないだろ？ お互いどういう人間か判断するために、まずは話す機会を持つべきじゃないかな」

「……そうですね」

「手っとりばよいのは飲みに行くことだけど、酒は君が警戒しそうなんで止めておくよ。まずは食事だけ。お互いを知るためにも、どう？」

「あなたの言い分は分かりました。ですが、もう少し時間をください」
「なんで？」

「今は仕事に集中したいのです。まだこちらに來たばかりで、精神的な余裕もないものですから」
大分支社に勤務することになった梓の目標は、売り上げが落ちている営業部門の業績アップだ。そのためには、今までおこなってきた土地所有者に対するリース建築の営業戦略を一から見直す必要があるし、営業部員への指導もある。

ここへは遊びに来ていゝるわけではないのだ。まず第一に仕事をしなければ、と梓は考えていた。
「お食事はある程度、仕事が落ち着いてからではいけませんか？」

「ふーん、どのくらい？」
一年とか二年とか言つてやろうか、と思つたが、二人きりの密室状態で相手の機嫌を損ねるのはまずい。

「営業は二月と八月が手空きになるので――」

「まさか二月まで待てとか言わないで欲しいな。今は十月だよ？」

先手を打たれてしまった。まあ、でも普通はそうだろうな。

梓は内心で頷きながら折衷案を告げる。

「では年が明けてからはいかがですか。あと三ヶ月くらい経てば、だいぶ落ち着くと思いますので」

「確か『ドア・イン・ザ・フェイス・テクニク』だっけ？ 負担の大きい条件を提示してから、それより負担の少ない本命の要求を吞ませるのつて。営業の仕事でも使うの？」

……こいつ馬鹿じゃないな。己の思惑を讀まれた梓はそつと唇を引き結ぶ。

「そういうわけではありませんが、突然の話に驚いていますので」

「俺が名刺を渡してから一週間は経っているけど」

「急せいては事を仕損じますよ」

「善は急せがつて言うでしょ」

こいつはやはり、ただ見た目がいいだけのイケメンじゃない。かなりアクが強い男だ。梓の方からアクションを取らざるを得ない状況を作ろうとしたことといい、今のやりとりといい、計算高いと断言できる。

確か水野が、彼は三十四歳の独身だと言つていた。これほどの美男子がその歳まで独身というのはちよつと解げせない。身に着けているものは仕立てが良く一流品だとひと目で分かるし、自宅の規模から考えても金銭に不自由はしていないはず。

そして自分をデートに誘うくらいだから、女嫌いでもない。希和子が言つていたとおり、ちよつとおかしな人物なのだろう。

「……分かりました。とりあえず今月中にはご連絡します。それでよろしいですか」

「よろしくないけど仕方ないね。でも月末までおあずけつてのは勘弁してくれよ」
悪戯つぽく微笑む男に、梓は引きつった笑みしか返せなかった。

3

そして連休明け。だるい気持ちで出社した梓を待ち受けていたのは、女性社員達の嫉妬の嵐だった。

「おはようございます……す」

ロッカールームに入ったとたん、女性社員から憎々しげな視線を浴びてしまう。語尾が伸びてしまったのは、驚きで一瞬間まってしまったからだ。

いったいなんなの。連休前から睨まれてはいたけれど、こんなに憎しみを込めた眼差しではなかった。いつもは堂々と振る舞う梓だったが、女性社員のほぼ全員から恨みのオーラを飛ばされればさすがに怯む。

早くこの場から立ち去ろうと、そそくさと自分のロッカーに荷物を入れて鍵を掛けた。ロッカーの扉がほんの少しへこんでいるのは気のせいだろうか。

だが、ここで余計な詮索をしてはいけない。そう思ってロッカールームを出ようとしたが、入り口を女性達に塞がれてしまった。

「……退いてくれない？」

言っても無駄なんだろうなと思いつつ、力の入らない声で告げてみる。予想通り素直な返事はない。陰のある声で問い返された。

「山代主任。昨日の夜、大分駅前で貴女の姿を見かけました」

「車から降りて来るところだったんですけど、あの車って林先生ですよ」

「白のアテンザ。ナンバーも同じでした」

「チラッと見た運転席の人の顔も、林先生だと思います。あの人を見間違えるはずないもの」
「どういうことか説明してください」

なるほど、こういうことか。梓は正面に立ち塞がる女性社員を眺めて納得する。

昨夜、林税理士に送ってもらったとき、自宅ではなく最寄りの大分駅前で降ろしてもらった。住んでいるところを知られたくなかったからだ。まさかそこを職場の人間に目撃されるとは。よほど自分の運勢は悪いらしい。

「あのね、もう始業まで十分を切っています。皆さん持ち場につきましよう。話を聞きたいなら仕事が終わってからにしてください」

あんな達は何しに会社へ来ているんだ。そう怒鳴ってやりたいのをぐっと堪えて言う。もちろんそれで彼女達が引くとは思っていない。案の定、四方八方から罵声が飛んできた。

「こっちの質問に答えなさいよ！」

「なんでアンタが林先生と一緒になのよ！」

「抜け駆けすんじゃないわよ！」

「名刺もらったからっていい気になってんなよ！」

「とっとと話さないよ！ このチビ！」

「そうよ！ あんたみたいなチビじゃ先生と釣り合わないわよ！」

身体的なコンプレックスを突く。百四十八センチしかない身長を気にしているので耳を塞ぎたくなるが、弱味を見せまいと何とか抑え、金切り声を右から左へ聞き流す。

とりあえず彼女達が落ち着くのを待とうと、言い返さずに突っ立っていることにした。

すると、突然ロッカールームの扉を激しく叩く音が響いた。女性社員達がピタリと口をつぐむ。

「おい！ ここでなにをやっている!? もう始業時間だぞ！」

一階の賃貸仲介を統括するチームリーダーの声だ。女だらけの職場をまとめる強面で、かなり厳しいことで有名な社員である。彼の一喝に、梓を除くこの場の全員が硬直した。

梓は、扉の前に立つ女性社員達を押して退けてドアを開ける。

「おはようございます。お騒がせして申し訳ありません」

「山代主任、これはどういうことだ？ 彼女達はなにを——」

「申し訳ありません。ロッカールームにゴキブリが出て、誰が退治するかで揉めていたんです」

「……俺の聞き間違いか？ 君を罵倒する声が聞こえたと思ったんだが」

「気のせいでしょう」

首を傾けて柔らかく微笑むと、眉間に皺を寄せていたチームリーダーはさらに渋い顔を作る。だ

が彼女が営業時代に培った接客用の笑みは、簡単に崩れたりしない。しばしの間、苦虫を噛み潰したような顔と営業スマイルがぶつかっていたが、先に折れたのはチームリーダーの方だった。

「……君達、早く仕事を始めなさい」

彼は、梓の背後で固まっている女性社員達へ向けて言う。梓が振り返ると、彼女達が蜘蛛の子を散らすようにしてロッカールームから出ていくところだった。

「山代主任、庇うことはないぞ」

「まあ、貸しを作っておいた方がいいかと思ひまして」

それに女性という生き物は、集団になると恐ろしいほどのパワーとエネルギーを生み出す。できれば敵に回したくない。

「ああいう女達は、一度ガツンと言ってやった方がいい」

「私もそう思います、とりあえず今は仕事が優先です」

今日は午前中に営業部員に同行する予定が入っているので、急いで準備をしなければならない。梓は彼に礼を言つて、小走りでオフィスへ向かった。

しかし、それで女性社員達の怒りが収まったわけではなかった。同行訪問から帰ってきて、お昼に自分のデスクでお弁当を広げていると、いつもなら外に行く水野がコンビニのサンドイッチを片手に寄ってきた。営業事務の水野とは席が近いので、帰社してからずっと監視されているような気配を感じていたのだが……

「で、山代主任、林先生と付き合っているんですか？」

ギラギラと光る瞳。肉食系女子とはまさにこういう子を指すんだな、と思いながら梓はおにぎりを頼張る。

「付き合っていないわ。だいたい、先生からいただいた名刺は破って捨てたでしょうが」

水野は梓のあからさまな拒絶を見ているせいか、今朝の吊るし上げには参加していなかった。とはいっても林税理士に惹かれている一人には違いないし、彼が梓にアプローチしたことを社内に広めた張本人でもある。こうやって梓から情報を引き出して、他の女性社員へ報告するのだろうか。

「じゃあ、なんで林先生の車に乗っていたんですかつ」

「逆に訊くけど、なんで先生の車だっと思うのよ。同じ車なんて世の中にいっぱいあるでしょ」

「いいえ。先生の車は白の初代アテンザスポーツ23S、ナンバーは大分三〇〇の××-△△です。間違えようがありません！」

梓は口に運んでいた卵焼きをポロリと弁当箱へ落としてしまった。

あ、あんた達は追っかけている男の車のナンバーまで覚えているのか。そういえばロッカールームでの吊るし上げのとき、そんなことを言っていたわね。

これはもはやストーリーカーの域に達するのでは。

梓の心の声が聞こえたのか、はたまた水野に常識が残っていたのか、彼女は頬を染めて視線を床に落とす。

「だって先生と会えるのは月末の一回だけで、しかも宇佐に住んでいるので偶然すれ違うこともできないんです」

だから同じ車を見かけるとナンバーを確認する癖がついているんです、と水野は続けた。梓はそんな彼女をまじまじと見つめる。

「宇佐市に住んでいるのは知っているのね」

「事務所の住所がなぜか取引先一覧に載っていないんですよ。後をつけた子が、宇佐市で必ず高速道路を降りるってところまでは突き止めたらしいんですけど」

「……」

まさしくストーリーカーだ。そこまでするともはや犯罪ではないだろうか。というかそれだけの気力があるなら仕事で活かして欲しい。

梓は、子を心配する親のような心境で水野を見つめる。すると彼女は、視線を上げて強い眼差しで梓を睨んだ。

「それで山代主任。なんで先生の車に乗っていたんですかつ」

まずい。平静を装い、お弁当をつつつきながらも、梓は本当のことを話すべきかどうか必死に考える。

水野の話を聞く前までは、林税理士が親友の義兄であり、昨日は親友に会いに行った帰りに、自宅近くの駅まで送ってもらっただけだと話すつもりだった。しかし彼と繋がりがあることを告げれば、きつと水野だけでなく他の女性社員達も梓に群がってくるだろう。個人情報を出して、彼とコンタクトをとるために。

彼がどうなろうと知ったことではないが、希和子に迷惑をかけることは絶対にしたくない。自宅

にまで彼女達が押しかけたりしたら大変だ。もうすぐ出産を迎える大事な時期なのに。

「昨日は……その、偶然宇佐市に行つてたのよ。観光なんだけど、ホラ、私つて大分県に来たばかりじゃない。だから色々な名所を回っているのよね。で、そのとき偶然林先生にお会いして、駅まで送ってもらつたの。大分つて交通の便が不便じゃない。それで、ね」

かなり苦しい言い訳だったが、水野は単純なのか、それとも想い人に気になる女性ができたことを認めたくないのか、ふんふんと頷いている。

「じゃあ、主任と先生つて付き合っているわけじゃないんですね」

「そうよ。それに、私は先生と今後も付き合う気はなんて一切ないし」

キツパリと否定すると、水野はそれを聞いて嬉しそうに微笑む。

「なーんだ、心配して損しちゃいました。でもいいなあ、私も偶然の出会いを期待して先生を探しているのに、一度も巡り会つたことがないんです」

そう言うとき水野は残りのサンドイッチを素早く平らげ、ポーチを持つて軽やかな足取りで化粧室へ向かう。

彼女の後ろ姿を見送つた梓はぐったりとして俯き、デスクへ倒れそうになる頭部を頬杖で止めた。昨日の帰り、林税理士からアドレスを教えてくれと何回か言われたのだが、連絡は自分からすると告げて頑なに断つたのは正解だった。

彼と付き合うつもりなどないので、今後の接触も避けなければならない。約束を反故にするのは気が引けるけれど、自分を守るためだ。

それに、新しい恋で失恋の傷を癒すなんて芸当ができるほど、自分は器用な人間ではないのだから……

4

ロッカールームの出来事から三週間ほど経つた十月の末。月に一回、林税理士が会社に来る日が出た。

梓はなんとかこの日に外出できないかと画策したが、やはり今年の運勢は悪いらしく、徒労に終わった。会いたくない人物と顔を合わせるかもしれないと思うと、朝からソワソワして落ち着かない。

ちなみに梓以外の女性社員は、別の意味で朝からソワソワしていた。誰の目から見ても彼女達の化粧はいつもより濃く、香水の香りもキツイ。経理とは関係のない部署の人間も、「ああ、今日は税理士さんが来る日だな」と気付いてしまうほどである。

十時半を過ぎた頃、廊下から前回と同じようなざわめきが聞こえてきた。どうやら梓を悩ませる元凶が華麗に舞い降りてきたらしい。梓は額を押さえて小さく呻く。

そして件の男性が営業フロアに入ってくると、声にならない嬌声がそこかしこから上がった。

「あらあら、お出ましのようね」

からかいを含んだ声をパートのおばちゃんから掛けられたが、梓は仕事に没頭しているふりを貫き、パソコン画面を見つめて自分に降り注ぐ視線をやり過ごす。だが悪い予感はあるもので、さつそく経理課長から声を掛けられた。

「山代さん、悪いがお茶を頼む」

経理課長は申し訳なさそうに言い、資料を集めに行った。その背中を見送り、梓は渋々と立ち上がる。

ああ、やつぱりお茶出しの指名を断つてはくれないのね。ホステスじゃないんだから、と思いつつも、林税理士は社長の身内だから仕方ない、と念仏のように己に言い聞かせて給湯室へ向かう。約束を反故にし続けていることを責められるかもしれない。その状況を想像して、思わず梓は胃の辺りを手で押さえる。

こんなことなら素直に連絡するべきだったかしら。しかしそこではたと気付く。名刺を破ってしまつたので、彼の連絡先を知らないことに。

希和子に訊けばすぐに分かるだろうが、まだ彼女にこの状況を知られたくない。もちろん、林税理士事務所にプライベートな内容の電話を掛けることは憚られる。どうやら自分で自分の首を絞めてしまつたらしい。

梓は溜め息をひとつ落としてお茶を淹れる。意趣返しに苦いお茶でも淹れてやろうか、と意地悪な考えが頭を過ぎるけれど、生来の真面目な氣質がそれを拒む。己の愚直さを齒がゆく思いながら丁寧に緑茶を淹れると、応接ブースへ運んだ。

そこには相変わらず素晴らしいほど男前な税理士が、書類を片手にパソコンを操作していた。現在、梓の頭痛の種であるその人物は彼女の気配に気が付くと、すぐに顔を上げる。

にこり、と屈託ない笑顔で見つめられて、拍子抜けしてしまつた。相変わらず、思わず見入ってしまうような美貌だ。

「お久しぶりです。やはりお会いできるのはこのときだけのようですね。残念だ」

彼は、前回希和子の家で会ったときのやや碎けた口調を隠して丁寧に話す。だが、その言葉の端々に約束をすっぱかされたことへの恨みが込められているのはよく分かつた。

「……そうですね。職場以外でお会いする理由はないと思いましたが」

「では、理由があれば会いに行つてもいい？」

「理由？」

「ええ。この仕事は昼までには終わりますから、一緒に食事でもどうです？」

おいおい、あんたはなにをしにここへ来たんだ。仕事をしに来たんじゃないのか。

「お弁当がありますから。申し訳ありません」

これは嘘ではない。以前は水野と会社近くのお店でよくランチをとっていたが、林税理士から名刺を受け取つて以来、彼女との関係がギスギスし始めてお弁当を作るようになったのだ。一人で出かけてもいいが、お店で社員の女の子達に会うと、ヒソヒソ話をされるので鬱陶しい。結局、食費の節約も兼ねて弁当を作ることにした。

そこへ山盛りの資料を抱えた経理課長が戻ってきた。梓は話はこれで終わりとばかりに素早くお

茶を配り、毅然と背筋を伸ばして応接ブースを離れた。パーティションで見えなくなるまで背中に彼の視線がまとわりつくのを感じて緊張する。たかがお茶出しでここまで神経を張りつめたのは、社会人生活で初めてだった。

自席へ戻りパソコンへ向かうと、すぐ近くに座るおばちゃん達が笑いを押し殺しているのが見えた。それとは対照的に隣席の水野が恨みがましく睨んでくるのも。その全てを振り切って、梓は仕事を再開した。

それから約一時間半後、ちょうどお昼休みに入った頃に応接ブースで人が動く気配がした。

ようやく帰ってくれる。小さく吐息を零した梓だったが、不穏な気配が背後から近付くのが分かり、冷や汗が流れた。大きな影が現れ、天井から降り注ぐ光を遮る。

「山代さん」

ちよつと部外者をフロアに入れないでよ！　いくら契約を結んでる税理士でも、ここの社員じゃないんだから！

梓は経理課長へ向かって怒鳴りたい気持ちだったが、もちろんそんなことは許されない。周囲は好奇心のために見て見ぬふりだ。

特に経理課長は、林税理士事務所との契約が代表取締役の紹介によるものだと思っているので、咎められないのだろう。もちろん梓もそれは当てはまるので、無視することもできずに「……なんですか？」と嫌々ながら答える。

「お茶、美味しかったです。ありがとうございます」

見上げれば悪魔の微笑みが彼女を見下ろしていた。隣席の水野がボーっと見惚れている気配を感じる。——でも私はそうならないわよ。

「山代さんも昼休みでしょう？　お昼と一緒に食べませんか？」

おいおい、あんたは人の話を聞いていなかったのか。

「先ほどお弁当があると申し上げましたが」

「もちろん覚えています。でも外はいい天気ですので、近くの公園でランチなんてどうです？」

いやです。と、梓が口を開きかけたたん、彼は名刺入れを取り出し一枚の名刺を梓のデスクへ置く。先月受け取ったものと同じで、プライベートの携帯番号らしきものを書いてある。

「……以前もいただきましたので、結構です」

突っぱねてみたが、どうやら相手は諦めが悪いらしい。更にニツコリと微笑んで口を開く。

「破り捨てられたと聞いたので」

思わぬ台詞に梓はウツと詰まった。なぜ知っているのか。素早く周囲を見渡せば、経理課長が慌てて忙しそうに仕事をしだした。そういうえば、社内で林税理士と世間話ができるのは経理課長だけだ。

ブルータス、お前もか！　梓は心の中で叫び、不本意ながらその名刺を受け取った。こんな場所で喧嘩をするのも大人げない。

「それにこちらから連絡をいただけると約束してくださったのに、一向になかったので待ちくたび

れました」

そう言いながら林税理士は身を屈めて、梓との距離を詰める。

「外、行きましようね」

ニヤリ。口角を吊り上げて微笑むその表情に、梓はぶるりと震えた。

一ヶ月前、初めて彼を見たときに感じた不吉な感覚が再び胸中に生じる。美貌の笑みが黒く見えるのはやはり気のせいではない。

梓は名刺をポケットに突っ込むと、ランチバッグを持って無言で立ち上がった。林税理士と連れ立ってオフィスを出ると、その背中に好奇心や嫉妬心が入り混じった視線が刺さるのを感じた。

確かに外はいい天気だった。秋の柔らかな光が、色を変えつつある葉の間から光のシャワーとなって降り注ぎ、爽やかな風が襟元をくすぐる。締め切ったコンクリートの建物の中で、パソコンと睨めっこすることによって鬱屈した気分が、解放されるようだ。

会社から少し離れた公園に着くと、林税理士はコンビニへ食べ物を買に行った。梓はベンチに腰掛けて大きく深呼吸をする。

気持ちいい。これで一人だったらもつと気分がいいんだけどな。

梓は真つ青な空を見上げて長い息を吐き出す。しばらくすると、ジャリ、と石と砂を踏み締める音が聞こえてきた。顔をそちらへ向けると、林税理士がコンビニの袋を提げて近付いて来るところだった。

「お待たせ。食べようか」

この公園に着くまでの間に、彼のご丁寧な仕事用の口調はなくなっていた。しかも、なにやら楽しそうな表情をしている。彼は梓の隣に腰掛けると、ビニール袋の中からおにぎりを取り出して包装を破った。それを横目で見ながら、梓もお弁当を膝の上で広げる。

しばらく、とりとめのない話をぼつぼつと交わしていたが、彼が三つあるおにぎりを全て平らげたところで本題に入った。

「この前会ったとき、月末までおあずけは勘弁してって言ったけど、忘れちゃった？」

「申し訳ありません。本気で忘れていました」

「酷いなあ」

その台詞とは裏腹に、彼はくつくつと小さく笑う。どうやら怒ってはいないようで、梓はホッと息を吐いた。

「まさか本当におあずけにされるとは思いもしなかったよ。こんなことは初めてだ」

「では貴重な体験をされましたね」

「面白いこと言うね、君」

「いえ、私は仕事が恋人の面白味のない人間です。気が利いた会話の一つもできませんし……って以前もお伝えしたと思いますけど」

「本当にそうだったら、営業としては致命的じゃない？」

思わず舌打ちをしそうになった。というか、本当に少し音を立ててしまったかもしれない。

梓が苛立ちを募らせているのに、彼の方は実に楽しそうだ。

「ごめんごめん、君とのやり取りが面白くて。女性とこういう会話ができるのは久しぶりだから」

「それ、世の女性に失礼ですよ」

「でもこれが俺の本音でね。君のような人は貴重なんだ。大抵はああいう女達に囲まれるからな」
そう言っただけは視線を梓の後ろに向ける。つられて目を向けた梓は、ビクリと体を竦ませてしまった。

会社の女性社員達が、木や茂みの陰からこちらの様子を窺っているではないか。しかもその人数はかなり多いようで、ちょこちょこ覗く顔は毎回違う。いったい何人、後をつけてきたのか。

意中の男を見る彼女達の表情はとろけているが、隣に座る梓を見たたん、眼差しが針のように鋭くなる。

手が震えてきてしまい、梓は箸を膝に広げたナプキンの上へ置いた。急速に食欲が失せ、脇に置いてあった弁当箱の蓋を取って閉める。

「もう食べないの？」

「……食べる気を失くしました」

彼女の青褪めた顔を見た彼は、小さく頭を下げた。

「嫌な思いをさせたな。俺はああいう手合いには慣れているけど、君はそうじゃないことを忘れていた。すまん」

すると彼の手がヒョイと弁当箱を持ち上げる。

「あつ、ちよつとなにを」

「食べないんだろ。いただきます」

ちよつと待てえつ！ こんな衆人環視の中で私の弁当をあんたが食べたなら、こつちがどんな目に遭うと思っているんだ！ しかもそれ食べかけだぞ！

慌てて奪われた弁当箱へ腕を伸ばすが、百四十八センチしかない梓と、百八十センチ以上ある林税理士とでは腕のリーチが違いすぎて全く届かない。彼は悪戯っぽい笑みを浮かべて弁当箱を頭上に掲げている。梓は立ち上がって取り返そうとするものの、彼もまた立ってしまうのでジャンプしても届かない。

梓は全く気付いていなかったが、その光景は周囲から見れば単にイチャついているだけに見える。

「ちよつと、怒りますよ！ 返してください！」

「食べないんだろ。なら俺がもらっても——」

「食べるわよ！ 食べるから返して！」

「うーん、でも一ヶ月近く約束をすっぱかされた恨みがあるからなあ。どうしようかなー」

ここでその件を持ち出すか。梓が恨みがましい目つきで睨むと、彼は見下ろしながらクスクスと笑って弁当箱を返した。

「いやすまん。でも本当に食べないなら、もったいないんで食わせてくれよ」

「食べるって言ってるでしょ！」

齒を剥き出しにして怒る梓を見て、彼はとうとう声を上げて笑い出した。あまりに長い間ヒーヒーと腹を抱えて笑っているので、怒り心頭だった梓も呆れてだんだん落ち着いてくる。

「笑いすぎよ」

「すまんっ、久しぶりに大笑いしたから止まらなかった」

「そのまま笑い死ねば？」

「ひでえなあ。俺が死んだら世の女性達が泣くぜ」

「その中に確実に私は含まれていないけどね」

「あー、そしたら俺が泣く。梓ちゃんに突き放されたら泣いちゃう」

幾重にも被った仮面を完全に剥ぎ取ったらしい彼は、おどけた調子で話す。

梓はふと、今の彼の言葉にあったある単語が引つ掛かり、箸を止める。

「ねえ、なんで私の名前を知ってんのよ」

「ん？ ああ、嫁さんが君のことを『梓先輩』って呼んでたから」

嫁さんって、あんた結婚してたのか!? 梓が目を見黒ませて驚いていると、林税理士はその表情から察したのだろう、すぐに訂正してきた。

「弟の嫁のこと。希和子って呼ぶと心の狭い弟が怒るんだよ」

でも、いくら義妹だからって本当の妹じゃないんだから、「希和子さん」が普通だろう。

そこへ梓の頭の中に親友の声が蘇る。

『ちょっとおかしいところがありますけど、まあ悪い人じゃありません』

梓は最後の「悪い人じゃありません」の部分に訂正線を引いておいた。この男は、ただのおかしな男だ。しかし、その彼は抜かりがないようだ。

「そうそう。名前と言えば、俺のことも和久と名前前で呼んでくれ。でないと会社で君を梓って呼びそうだから」

「はああっ!」

あまりの衝撃で二の句が継げない。なぜ自分が彼の名を呼ばないことと、彼が自分の名を呼ぶことに繋がりがあるのか。全く脈絡がない話の流れに全身を戦慄させる。

「それって脅しっ!」

「なんで？ 脅される心当たりでもあったか？」

林税理士はにこやかに微笑む。その笑顔は見惚れるほど素敵だが、梓はそれどころではない。彼の闘争心がメラメラと燃え上がった。

ちつくしよう! 今に見てなさいよっ! 怒りで頬を真っ赤にしながらも、悔しさをこらえる。

口から「ううっ」と唸り声が漏れると、再び彼が笑い出した。

ゲラゲラとひとしきり笑う男を横目に、梓は食べ終わった弁当箱をランチバッグにしまった。

「話し方が変わったな」

「はあ？」

話し方がどうかしたのか。ギロリと険しい視線を彼に向ける。相手は全くダメージを受けていないようで、長い腕を伸ばして唇へ触れようとする。梓は慌てて仰け反った。

「ちょっと！ いちいち触らないでっ」

「そう、それ」

「なにがよ」

「口調が砕けている。いい傾向だ」

梓はハッと手で口を押さえる。そういえばいつの間にかタメ口で喋っていた。いったいいつからだろう。気が付かなかった。

満足そうに微笑む男——和久は指を引っ込め、やや表情を改めて話し掛ける。

「俺は君が気に入った。付き合いたいと思うんだけど、どうかな」

梓が顔を上げると、柔和な顔つきの和久と目が合う。その眼差しに、雰囲気は今までは違う真摯な気配を感じ取って目を瞬かせた。

「周りを見れば分かるだろうけど、俺はこの顔のせいで好きでもない女ばかりに囲まれてきた。そのほとんどはストーリーカー紛いのことをする、ちょっと常識から外れた女性だ。普通というか、まともな女性はこの顔に気後れして近寄ってこなかった。君のように容姿に惑わされない人は滅多にいなかったんだ」

その口調の中に寂しさを感じた梓は、今までの反発はどこへやら、憐憫の情が湧いてきてしまった。梓はそんな己の心の変化に戸惑う。

「……あの、なぐさめにはならないかもしれないけど、人間の第一印象は視覚から形成されるわ。だから、貴方にたくさん女性の女性が近付くのは仕方ないと思う。けど、全ての女性がそういうストー

カー紛いの人達だったわけじゃないんでしょう？」

「もちろん。だから昔は落ち着いた印象の女性と付き合ってたんだぜ。けど駄目だったな。やっぱり同じことをやられた。俺に近づく人間の中で、本当にまともな女なんて一人もいなかった」

梓は少し寂しい気持ちを抱きながら頷く。まともな感覚、というか常識を持つ人間なら、好きな男性の嫌がる行為などやらないだろう。

「それで私なの？」

「そう。嫁さんちに遊びに来た君を、見かけたんだ。そのときピンときてね」

「はあ」

やはり転勤した直後、希和子の家へ遊びに行ったときに気に入られたらしい。いったいどこが良かったのだろう、と梓は首を傾げる。

和久はさらに話し続ける。

「それで先月、声を掛けてみたんだ。この顔に惹かれない女性だったから興味を持った。しかもつけ回すようなことはしないし、話してみると面白い。くるくる変わる表情が可愛いと思っただけ」

梓は「可愛い」と言われたことに頬を染めるが、すぐに表情を引き締めて視線を地面に落とす。これほどのイケメンに好意を示されれば悪い気はしない。だけど今の自分には恋をする余裕はないのだ。

「ごめんなさい、私……、恋愛はしばらくしたくないの」

梓は未だに数ヶ月前に別れた男の影を引きずっていた。

元彼とは社会人になつてから長い年月を共に過ごした。

別れて転職した今でも、仕事中に手が空いた瞬間や部屋で一人で過ごしているときのふとした一瞬、そして今みたいに恋愛のことを考える刹那に、元彼とのことを思い出してしまうのだ。

和久はなにか事情があることを察したのか、俯き加減の梓の顔を覗き込んでくる。

「なら、恋愛じゃなければいい？」

「え……」

どういう意味なのか。首を捻る梓に、彼は自然な笑みを向ける。

「俺は君を見て『好感』を抱いて、それが今日『好意』に変わった。でもたぶん、これはまだ『愛情』じゃない。それでも君を無視できない気持ちがあつて、もっと君のことを知りたいと思つた。だからまずは友達から始めればいいんじゃないか？」

こちらを見る目に含まれる熱が、梓の体内へ潜り込んでくる。見つめ合つたまま動けなくなった梓は、どんどん体温が上昇するのを感じてゴクリと唾液を呑み込む。

これ以上、見ては駄目だ……

魂を吸い取られるような感覚が恐くなり、自分から視線を外して俯いた。

負けた。頬や耳、そして首筋まで熱く感じて赤くなるのが自分でも分かる。ショートヘアの梓ではその変化がバレバレだろう。そして自分の反応を眺める彼が嬉しそうな表情になるのも分かった。「とりあえずメシを食いに行こう。飲みでもいい。前も言つただろ、お互いを知るためにも食事に行くべきだつて」

「……飲み友達で終わるかもよ」

「まあ、そうならないよう努力するよ」

彼の自然な笑顔に、梓の心がドキリと鳴つた。不安を抱かせるような黒い笑いではない、柔らかな表情が眩しい。何だか恥ずかしくなつてきて俯いてしまう。

ふと、自分の腕時計が目に入る。昼休みが終わりに近付いているので、ここで切り上げることにした。ベンチから立ち上がる直前、連絡先を教えて欲しいと告げる和久に素直に頷いた理由は、自分でもよく分かつていない。ただ「林和久」と新たに登録されたアドレス帳を見て、不思議な気分になった。

だが――

「行きは良い良い帰りは怖い……」

「ん？ なんか言つた？」

言いましたとも。公園からの帰り道、梓は和久と並んで歩きながら溜め息を落とす。

「公園に来るときは気付いていなかったからいいけど、帰りは気付いちやつたから怖いなあつて言つたのよ」

「なるほどね」

そう言いながら彼は後ろを振り返つた。すると、二人をつけてきた女性社員達がパツと建物の陰に隠れる。逆に視線が合ったことに喜び、甲高い声を上げたりしている。

「……あの子達を刺激するから、送つてくれなくてもいいんだけど」

「君んとこの会社の駐車場に車を置いてあるからね。俺も行く方向が同じなだけ」

「ああ、白のアテンザね。ナンバーは大分三〇〇の××ー△△で合ってた？」

「よく知っているな」

彼女の頭上から驚愕の声が降ってくる。

「貴方の追っかけが教えてくれたのよ。連休のとき大分駅まで送ってくれたでしょ。そのとき貴方の車を見たって騒いでいたわ。ナンバーも同じだから間違いないって。すごいわよね」

「ああ、そういうことか」

和久は納得したように頷いている。梓がナンバーを知っていたことには驚いたのに、ストーカー行為を知っても冷静だった。そのことに梓は眉をひそめる。

「驚かないの？」

「もっと驚くことを教えてやるよ。一ヶ月前、君に名刺を渡した日の夜から、俺の携帯へ引つ切りなしに電話が掛かってきた。全て名東ホームコーポレーションの女性社員からだ」

「え？」

それはどうということなのか。目を瞬^{また}かせる梓へ、彼は「ニヤリ」と例の黒い笑みを浮かべる。

「君、俺の名刺をかなり細かく破り捨てたんだって？ 彼女達は頑張って名刺を復元させたんだろ。うな。涙ぐましい努力だよ」

梓は目をまん丸に見開いてしまった。和久の名刺を破り捨てた時、ゴミ箱の中には他のゴミもたくさん入っていた。細かくちぎった名刺の欠片^{かけら}を見つけ出すだけでも難しいはず。それなのに紙片

を全て集め、元通りに貼り合わせるなんて。

梓の足がピタリと止まる。一拍遅れて和久の足も止まった。

「すまん、胸くそ悪い話を聞かせたな」

「……うん、私こそごめんなさい。まさかそんなことになるなんて思わなかったから」

思い出したくもない昔の記憶がよみがえった。——そうだ、ストーカーとは常識外れなことを平然とやつのける人間だった。

「そりゃ、普通はそんなことしないからな。でも俺は慣れている。気にするな。携帯も替えたし」

「本当にごめんなさい……軽率だったわ、すみません」

携帯を替えるという手間と費用まで掛けさせた罪悪感で、梓はしょんぼりと落ち込んでしまった。和久に促^{うなが}されて歩き始めるが、だんだんと頭が下がって視線がアスファルトに釘付けになる。そんな彼女へ笑いを含む声が掛けられた。

「じゃあ立ち直る話でもしようか。以前、君を車で送っていったときの会話を覚えている？」

「へ？」

車で送ってって、連休のときのことよね。ええっと……

宙を睨みながら梓は記憶を反芻^{はんすう}する。食事に行こうと誘われて、自分はもう少し時間をくれと言って、今月中には連絡すると約束をして、でも自分はそれをすっぽかして——今に至る。だから今日、彼とランチをすることになったのだ。

……ん？

おかしい。自分が名刺を受け取った直後にそれを捨てたことを、彼は当日の夜に知らされていたという。ならば当然、その後の三連休に会ったときも知っていたことになる。しかし、それではあのときの会話に矛盾が生じる。

梓が自分の電話番号を捨てたと知りながらコンタクトを求め、『月末までおあずけつてのは勘弁してくれよ』と念を押す。これはどういうことなのか。

ポカンと呆けて彼の顔を見上げると、ようやく気付いたのかと笑いながら見返してくる。

「一ヶ月もすっぱかせば、さすがに負い目を感じてくれるかなと思って放置したのさ。真面目そうな君なら、罪滅ぼしでランチぐらい付き合ってくれると思って」

実際、付き合ってくれたしね。そう話す和久は悪戯が成功した子供みたいな表情になった。瞬時に梓の顔が怒りで赤くなる。

「だ、騙したのね！」

「駆け引きと言ってくれ」

「嘘つき！ 同情して損したわ！」

「おや同情してくれたんだ。言うんじゃなかったかな」

しれつとうそぶく男は大変楽しそうに笑っている。梓は心の中で、「この策士！ 腹黒！」と罵りながら歩調を速めてズンズンと先を歩いた。会社の敷地に入るまで彼を従えるような形で歩き、そのまま振り向かず裏口から中へ入ろうとする。だがそのとき。

「——俺のことで落ち込むことはないさ」

背後から聞こえた呟きに、梓は思わず足を止めてしまった。パツと振り向いた視界に映るのは、

すでに背を向けて駐車場へ向かう和久の姿。とっさに梓が、「林さん」と声を掛けると、彼は振り向かず手を上げながら、

「和久。……今夜連絡するよ、梓」

と告げて颯爽と立ち去っていった。

呆然と立ち尽くす梓の脳裏に彼の声がよみがえる。

『じゃあ立ち直る話でもしようか』

彼は自分を氣遣ってくれたのだ。冗談のような口調で、真実を軽やかに織り交ぜて。

梓は彼が消えた空間をじつと眺めながら、形容しがたい気持ちの奥に広がるのを感じる。

自分の胸を押さえ、知らず知らずのうちに詰めていた息を大きく吐き出した。

己の軽率な行動で落ち込んでいた自分を浮上させてくれた——そんな彼を少し見直す。彼と付き合うという選択肢はないが、友達として会うのは構わないかな、と考える。

だが、その気持ちは三階のフロアに入る直前、待ち伏せていた女達にトイレへ拉致されたことで揺らいでしまったけれど。